

櫛

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 13

1991
MARCH

資源共有に向けて

田村潤二

1 3つのトピック

平成2年度の後半に入り、図書館の文献情報提供サービスの向上に関する次のような3つのトピックが実現しました。

1つは、昨年11月から開始した、図書館と総合情報処理センター共同提供による各研究室向けの岡大 OPAC（オンライン利用者目録）です。本学の図書・雑誌情報データベースを同センターの大型計算機 ACOS 2010 に乗せ、津島キャンパスの研究室には光通信ケーブルを通じ、その先、鹿田キャンパスには高速デジタル回線、倉敷キャンパスには特定回線、さらにその他の地区には公衆回線を通じて提供するものです。

2つは、鹿田分館への CD-ROM の導入です。前号でご紹介したように中央館にも各種の CD-ROM ソフトが導入されていますが、今回導入されたのはかねてから鹿田地区の要望が強く、全国的に最も利用されている医学

文献情報データベース Medline（メドライン）です。その使いやすさ、検索能力の高さが好評で、本年1月に公開されて以来、その人気は極めて上々ということです。

3つは、図書館専用電算機システムの増強です。CPU（中央処理装置）メモリ及び磁気ディスクの増設、さらに中央館、分館合わせて21台の端末増設が実現しました。これによって慢性的なハードウェア不足が解消され、電算化をさらに推進するための基盤整備ができました。とくに、これまで形ばかりであったオンライン利用者用端末コーナーを充実することができたこと（6台を設置）、今後のデータベース形成への展望が開けたことが特筆されます。

以上3つのトピックは、いずれも、「新しい媒体（電子的、光学的）の導入・活用による文献情報提供サービスの改善」という図書館の目指す方向に対し、学内各方面のご理解

を得ることができた結果、実現したものです。

本稿では、この中で、岡大 OPAC のもたらし意義と今後の課題について考えてみたいと思います。

2 循環器と血液

岡山大学の中で、どういう図書や雑誌が、どこにあるかという情報（以下、書誌・所在情報と言います）を教えてくれるのが岡大 OPAC です。この機能自体は新しく生みだされたわけではありません。これまでもカード体の「全学総合目録」がその機能を果たしてきたことはご存じのとおりですが、OPAC の優れたところは、情報の早さ、網羅性に加え、通信網を通じて全学どこからでも検索可能となったところにあります。

もちろん、事情は万全ではありません。岡大 OPAC が本当の意味で有効に機能するには、①遡及入力（過去の資料に遡って書誌・所在情報を入力する）を実施してデータベースを拡大する必要があること、②検索システムを改良してもっと使いやすいものとするなど、等の問題があります。

しかし、とりあえずは新しいメディアによる情報の流れができたこと、いわば大学の循環器系を通じて、血液のように大学の隅々まで書誌・所在情報が流通することが可能になり、図書館という限られた空間から情報を開放したことにひとつの大きな意義があります。

3 文献自体の入手が問題

ところで、岡大 OPAC は岡山大学における書誌・所在情報、つまり文献の所蔵状況を明らかにするわけですが、その先の文献自体の入手を保証するわけではありません。文献自体の入手（図書館の側から言えば文献供給）には別の問題があります。

急進展する今日の学術研究の中では、文献資料は大量かつ急速に増加しています。これらの文献資料をどのようにすれば迅速に入手

できるかということは重要な問題です。図書館予算は微々たるものですし、各研究室の予算も必要な文献資料を入手するにはあまりにも少ないはずですが、現状がそうであるだけでなく、今後ますますそうなってゆくと考えられます。

4 現場主義と閉鎖性

一方、本学も含めて歴史の古い各大学では一般に、研究用文献の多くは各研究室等に細分された予算によってその時々の研究上の必要に応じて選定され、そのまま各研究室等に分散配置されるという現場主義の仕組みになっているところが多いようです（もちろん、本学の中央図書館における共同利用自然科学外国雑誌のように、共同利用を前提として選定され集中配置されているという例もたくさんあります）。また、共通経費としての図書館予算はそもそも規模が小さい上、その多くは学生の学習用図書・雑誌の購入で終わってしまいがちです。

このような状況の中で生じやすいことは、①蔵書構成のアンバランスや無用な重複購入という全体的に見た場合の収集面における無計画性、②他の利用者がアクセスしにくいという利用面の閉鎖性です。こうなると先に述べた OPAC の意義は半減してしまいます。OPAC で検索したところ、当然在ってしかるべきものがない、在ることはわかっても研究室にしまいこまれ、利用することができないということが頻繁におこることになります。特に後者の場合、利用できないのであれば、所在情報など知らないほうが精神衛生上よいという人さえいます。

5 資源共有に向けて

このような現場主義の選定や分散配置という仕組みは、研究上の待たなしの必要から生じている等、それなりの理由があり、一概に否定できないことはいうまでもありません

が、ただ、それだけでは先行きは見えていません。現代の学術研究の様相は、なんにつけ自給自足、自己完結的考え方では無理なようで、文献の入手についても資源共有の考え方の徹底が必要のように思われます。

誰の予算によろうと、どこに配置されていようと、大学の、ひいては研究者全体の共有資源であるという考え方、そしてそれに基づいた共同利用を促進する調整機能がどこかで働いている必要があります。

この調整機能は、いうまでもなく図書館的機能です。本学図書館もこれまで微力ながら果たしてはきましたが、今後は、なお一層この機能が期待されるはずで。

図書館がこの期待によく応えることができるためには、多くの要件があります。例えば蔵書構成の核となる部分を構築するための共通予算の拡充ということがあります。また、文献の十分な収容スペース（現在、最も緊急な課題です）と適切な人員の配置ということもあります。学部レベルであれ、全学レベルであれ、十分なスペースがあれば狭い研究室

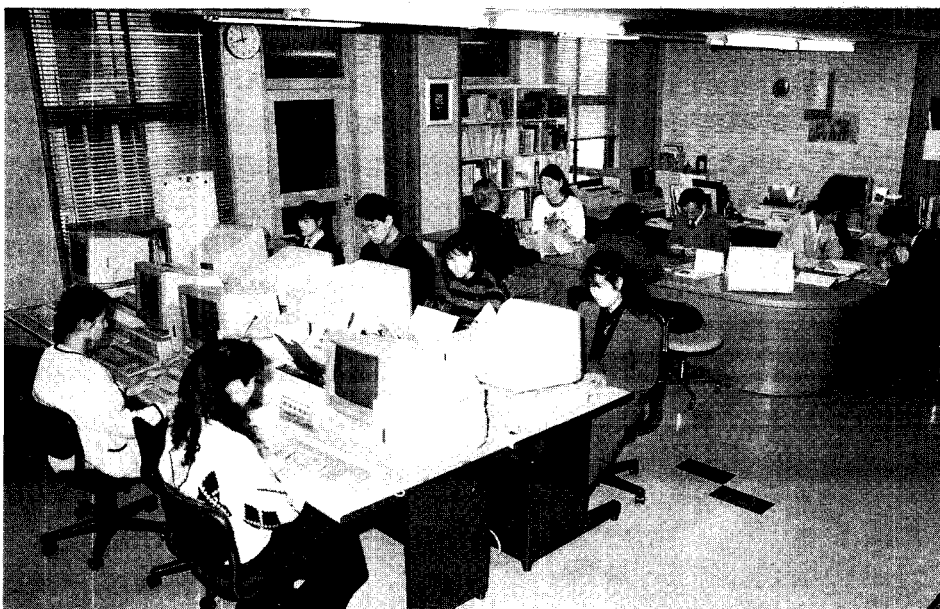
に窮屈に積み重ねる必要もないし、適切な人員配置のもとに管理・運用面に手が行き届くことになり、全体として資源共有のための最も有効な環境整備ということになります。

また、岡大 OPAC がこの点でも大きな意義を持っています。本学における文献の所蔵状況を明らかにすることは、現場主義の選定においても、必ず資源共有、共同利用の考え方を促進する契機となり、長期的に見て本学の蔵書構成にいい影響を及ぼすはずで。

6 おわりに

資源共有とか共同利用ということは学内だけの問題ではありません。現在、「学術情報システム」という全国レベルの学術情報資源共有ネットワークが明確な形をとりつつあります。本学図書館もこのような全国ネットワークと学内情報流通網のノードとして、双方に貢献すべきことが要請されていますが、その時にあたって、まずは学内における資源共有の在り方が問われていると思う次第です。

(たむら・じゅんじ 附属図書館情報サービス課長)



中央図書館のCD-ROMとOPACコーナー

資料保存と対策

—いま、何が問題か—

渡邊 正人

1 はじめに

酸性紙の劣化問題をきっかけとして、全般的な資料保存（プリザベーション）の在り方への関心が再び高まっている。

単に壊れたものの修復という技術的問題としての捉えかただけではなく、利用上のアクセシビリティの確保という観点からも、本学図書館のいくつかの問題点を考えてみたい。

2 酸性紙の劣化と対策

近年、特に酸性紙の劣化による資料の損壊が大きくクローズアップされている。とりわけ、この問題は第4回日米大学図書館会議（1988年）において、酸性紙劣化による資料の消失に対して緊急に対策を講ずる必要のあることが提言された。これを受けて第36回国立大学図書館協議会総会（1989年）で「資料の保存」というテーマで討議され、各大学図書館の実情を把握するため九州大学が窓口となって1989年7月に実態調査が行われた。

この調査に対して、95国立大学中91大学附属図書館から回答があった集計結果の報告によると、全大学のコレクションを含めた劣化率は1.40%となっている。ただし、この劣化状況は中央館、分館の範囲であり、学部レベルでは未確認であること、なおかつ九州大学における詳細な調査結果を考慮すれば、この劣化率は3%相当であろうと推計されている。この調査結果をみても酸性紙劣化による資料保存の問題は、既に相当深刻な事態に至っていることがうかがえる。

幸い、岡山大学に所蔵する資料には、現状では酸性紙の劣化により著しく損耗したものはないということであるが、この問題は年を

経るとともに確実に進行し、表面化してくることを念頭に入れた対応が必要であろう。

対応策として脱酸処理技術も開発されてきているようであるが、コスト等から考えても酸性紙を使用した原資料そのものを保存することは相当な困難を伴うことである。

酸性紙の劣化には温度並びに湿度等の保存環境が影響することも考えれば、消極策ではあるが当面は劣化の進行を少しでも抑えるための環境整備が求められることとなる。

3 メディアの変換

現実的な保存方法として、マイクロ化等他のメディアへの変換が考えられている。既に国立国会図書館では明治期刊行図書16万冊3,500万ページのマイクロ化事業を5カ年計画で発足させている。

本学においても、池田家文庫のマイクロ化事業に着手した。池田家文庫は、岡山藩240年間の藩政史料約6万点と和漢典籍約3万2千点からなり、わが国幕藩体制史研究上第一級の貴重な史料である。これらの資料のうち特に古文書・記録類はオリジナルなものだけに、保存は大変重要な課題である。

幸いこれらの資料は、素材が和紙であるため、酸化の進行による劣化の心配はないが、これまでも広く研究者に公開してきており年間1万点近い資料が、閲覧または写真撮影による複製等の利用に供され、これに伴う損耗は避けられない状況にある。

しかも、これらの資料は350年以上経過したものから最も新しいもので100年以上の年月を経ており、虫食い、水濡れ等による損傷も相当量に上っている。これまでも補修を行

い資料の保存に努めてきたが、量的に膨大であり、しかも補修そのものが極めて特殊な技術を要するため、経費もかさみその対応に苦慮していた。ご承知のように昨年8月から本学と丸善並びに富士写真フイルムとの共同事業により、約3年をかけてオリジナルな資料である藩政史料約6万点と和漢典籍の内特に藩政史料とのかかわりで学術的価値の高いものの一部をマイクロ化することとなった。これらについてはさまざまな形で報告されているので詳細は省略したい。

このマイクロ化は、資料の保存面で画期的なことのみならず、斯界の研究者に多大な貢献をすることと考えられる。それだけに、この大事業にあたり文部省をはじめとする、学内外のご支援とご協力に心から感謝する次第である。

しかしながら、マイクロ化することで保存面での問題が全く解決するものではない。

これらの貴重な原資料を後世に継承していく使命を果たすためには、今後とも補修をはじめ保存環境の充実などの必要な手当てを継続していかなければならないことには変わりはない。

4 図書館機能と資源の利用・保存

大学図書館の機能は、それぞれの大学図書館に求められる内容によって異なってくる。本学では1989年3月の新中央図書館建設企画委員会で承認された新中央図書館構想マスタープラン案があるので、これに基づいて考えてみたい。新中央図書館は、6つの機能によって構想されているが、学習・研究・総合・保存・学術情報・資料センター及び電子図書館が本学の教育・研究活動を支援する中心的な柱として、また、21世紀を展望した大学図書館として位置づけられたのである。

これらが機能するには、資料・サービスと施設が有機的に関連していることはもちろんのことであるが、とりわけ収蔵スペースが不

足していれば、いかに優れた資料があっても活用するうえで大きな障害となることは明白である。

特に、学術情報システムの構想は「資源の共有」を基本としているが、その最小単位は学内における資源の共有ということができよう。学内での資料の有効利用を真に効果的に行うには、岡山大学の場合、中央図書館への資料の集中化が重要なポイントといえる。

約70万平方メートルもある津島キャンパスには、8学部と教養部その他研究施設があり、しかも各部局に図書係が置かれていない現状を考えれば、図書館が資料センターとしての役割を担う必要がある。

そして、資料が良好な環境のもとで運用・保管されることによって、はじめて利用と保存が両立することになる。

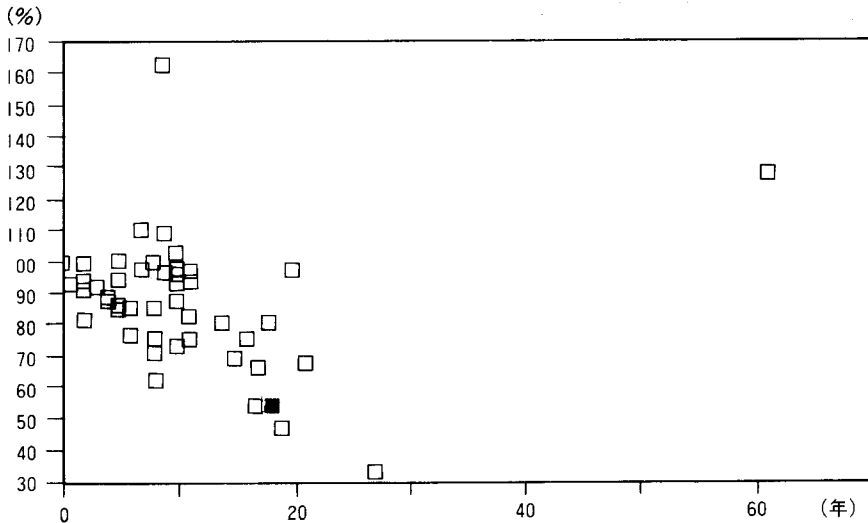
5 収蔵スペースの現状と保存上の課題

施設面から見た収蔵スペースと資料の保存状況に触れてみたい。

中央図書館の資格面積はおよそ14,000平方メートルあるが、現有施設面積は約7,400平方メートルで、充足率は54%しかない。国立大学図書館協議会の調査によると主要47国立大学図書館の基準面積の平均充足率は84.4%である。次ページのグラフを見ていただくと、いかに本学中央図書館の施設整備が遅れているかがわかっていただけたと思う。

一方、蔵書数は岡山大学全体で、150万冊を突破している。この内、鹿田分館の22万冊と資生研分館の15万冊を除いても、110万冊を超えている。収蔵スペースの方に目を転じてみると、収容可能冊数は63万7千冊分しかなく、前年度末には1階に集密書架を設置して、およそ2万冊分の収蔵スペースを確保したが、焼け石に水の感はまぬがれない。しかも、これ以上書架スペースを多くすれば、当然のことながら閲覧部分を縮小しなければならないわけで、現状でも閲覧席数は基準をは

資格面積に対する充足率（平成元年度）



(注) 1.『国立大学図書館協議会図書館建築基準に関する特別委員会中間報告』による。
 2.各大学の主要な団地にある図書館（岡山大学の場合は中央館）だけを取り出し、その最終増改築後の経過年数と充足率との相関関係を示している。
 □が主団地、■が岡山大学中央館である。

るかに下回っていることを考えれば、これ以上の書架増設は図書館における閲覧機能を阻害することになりかねない。

ちなみに、現在、資料がどのような状況にあるかといえば、書庫の中の資料はぎっしりと余部のない状態で詰まった棚が並び、その上に棚板との隙間には横にして置かれた図書が数多く見られる。また、足元に目をやれば書架と書架の間の広くない空間にも、床に紙を敷いた上に積み重ねられた状態の図書がある。更に、研究室から返却された図書が箱詰めのみである姿を見ると、書庫というより倉庫という感じさえする。

一方、研究室でも資料があふれ、返却を希望される教官もかなりあるように聞いているが、現状では到底受領できる状況になく、研究室でも図書館と似た環境におかれた資料が少なからずあることが推測される。

これでは、資源共有による資料の有効利用以前の問題として、資料保存の面からも大変憂慮される事態である。

当館の蔵書のうち、池田家文庫等の和紙を素材としたもの以外はほとんどが酸性紙である。酸性紙は冒頭で触れたように、年を経ると共に劣化は避けられない運命にある。しかし、保管状態によってはその寿命を延ばすことができるが、現状は逆でむしろ劣化を促進させていると思われる要素が多すぎる。その主要な原因は、収蔵スペースの大幅な不足による環境の劣悪さにある。

6 むすび

以上、資料の保存に関していくつかの問題を考えてきた。その結論として、本学における緊急課題は、現在概算要求している6,400平方メートルの図書館新営の実現を図ることである。そして、良好な環境のもとで学習・教育・学術研究に寄与できる器づくりをすることである。そのことが文化的遺産としての資料を保存するうえでも欠かせない条件といえる。

（わたなべ・まさと 附属図書館情報管理課長）

池田家文庫の保存環境

佐橋 謙

1 はじめに

紙の劣化の機構は大変複雑である。特に古文書の保存のような、百年あるいは千年後にどうなるかといったような気の遠くなるような長期間の劣化については、基本的には化学変化であろうが、カビや害虫の発生などは生物学の範囲になろうし、本を立てたり積み重ねたりして置いたときの変形の問題は物理学の問題であろう。このように考えると問題は簡単ではなく、紙の劣化の過程は完全には把握されていないと言わざるを得ない。

ということは、例えば、計算機によってその劣化の過程をシミュレートすることはできないということ、どのような環境で保存すれば最良なのかとの議論もまたできない。なぜなら、紙の劣化に対するシミュレーションができるまでは、千年たった後の状態は千年たたないと解らないからである。古文書の保存環境はかくあるべし、という議論ももちろん古くから図書館・博物館の関係者から出されてはいるが、根拠がいま一つあいまいである。

このような問題はその道の専門家に任せるとして、現在古文書がどのような環境で保存されているのかを記録しておくことも、将来上述の問題が解決したとき、その後の環境をどうするかを決めるときに有用である。そのような観点から、池田家文庫を収納している附属図書館特殊文庫がどのような環境下にあるのか、筆者らの測定に基づいて要約したい。

2 温度環境について

問題の収納庫は1983年3月以前は空調施設ではなく、それ以後収納庫の消火設備完成に伴って気密構造となり空調施設が整えられた。

古文書に対する温度の影響は、それが古文書に含まれる水分にも影響するため重要である。

1983年以前の環境は、例えば、1975年8月の実測では建物外の気温と比べ、収納庫内は一日の平均で8~10℃も高かった。この時の収納庫内の最高気温は40℃、最低気温は35℃程度であった。これは問題の収納庫が4階建ての書庫の最上階にあり、屋根が日射のため高温となるためで、事実、その書庫の8月の屋上の表面温度は、天気が良ければ60℃を越えることは珍しくない。

一方、空調設備が完成した後の1983年8月の実測では、収納庫の同じ場所での一日の平均気温は建物外の一日の平均気温と同じであった。つまり空調設備のおかげで平均気温で10℃近くも収納庫の温度が下がったのである。このことは、一見空調施設が効果をあげたものとも考えられるが、他方、別の見方をすると空調設備なんかなくても、屋根の焼ける最上階でなく、かつ、空気の流通をよくしていれば、その温度にまでは下がっていたはずだということで、省エネの観点からすれば首をかしげなくてはならないことにもなる。収納庫を新しく作り替えるような時にはその場所の選定には、このような気象学的な考慮も必要だということである。

3 湿度環境について

湿り気の多少が図書の保存に悪影響を持つことは、誰もが日常的に経験しているところであり、多湿のもとにカビが発生し、乾燥下で紙の強度が低下し装丁が崩れる。

筆者は1985年11月から2年間あまり、問題の収納庫で気温と湿度の継続観測を行っ

た。その結果を図1、2に示す。両図とも白丸が第1年目、黒丸が第2年目である。図1は湿度を示すが、第1年目と第2年目との差が明瞭である。第2年目は全期間中50~60%の間におさまっているが、第1年目の夏期に40%、冬季に30%という低湿が目だつ。この原因は図2に示す気温の変化を見れば明らかで、第1年目の冬季に明瞭な高温期が、夏期に低温期がみられ、空調設備の効果を示している。つまり、冬季の低湿は収納庫の温度を高くしたためのも、夏期の低湿は冷房のために収納庫内の水蒸気が液体の水になって収納庫外に排出されたものと考えるのである。要するに気温を制御したために湿度がそれに伴って変化したのである。第1年目の低湿が、悪くすると古文書に悪影響を及ぼすか

も知れないということで第2年目には空調を使用しなかったのである。

4 収納庫内の水収支

「水収支」という言葉はあるいは耳馴れない言葉かも知れないが、財政収支と同じように、ある「もの」を考え、その「もの」に出入りする水の量を定量的に決めようとするので、今の場合その「もの」として収納庫内の空気、図書を考えるのである。

図1、2の第1年目の結果から、夏期に冷房をかけると収納庫内の水蒸気圧が減少するという事実が見出された。この時その前に収納庫の中にあった水蒸気はどこへ行ったのか。それを確かめるための測定を1989年8月に収納庫で実施した。この時は、気温、湿度

図1 湿度の年変化

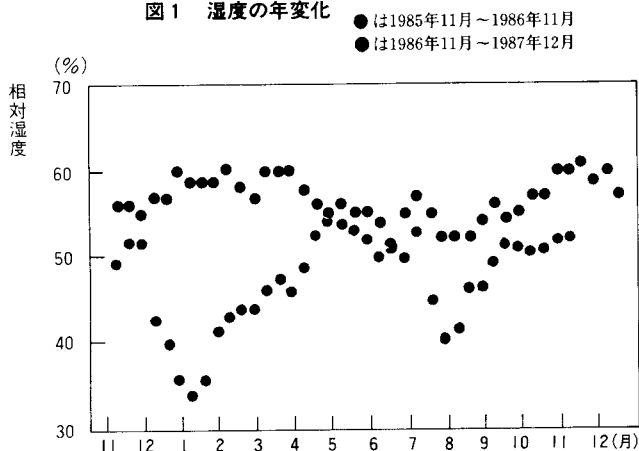


図2 気温の年変化

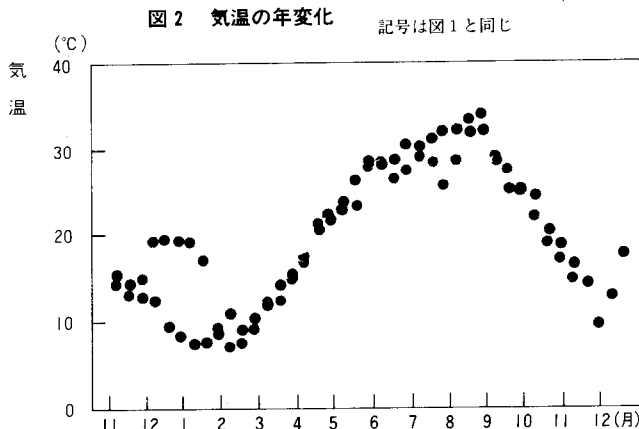
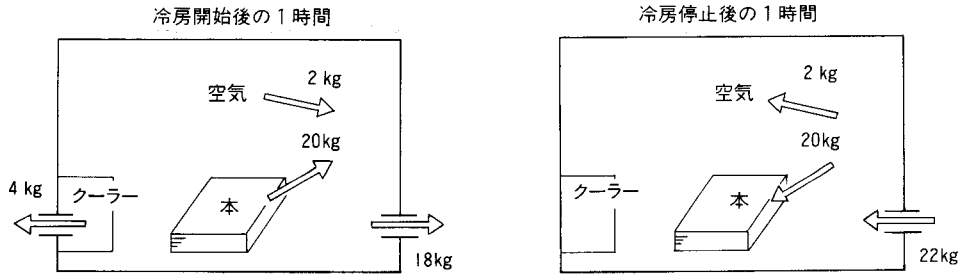


図3 収納庫内外の水分の流れ



だけでなく、冷房機から排出され収納庫の外に出る水の量、収納庫に収納されている本の重量、その本の表面温度、表面含水量などの測定も行った。その結果冷房開始と共に、空気中の水蒸気圧、本の重さ、表面含水量、表面温度がそれぞれ低下し、冷房終了と共にそれらはすべて上昇していることがわかった。

このときの冷房機から排出された水の量の実測値も考慮して、冷房機の運転開始時から終了時にかけての間の収納庫内の水収支を考えると、図3のようになった。図3左半分の「冷房開始後の1時間」については、収納庫内の古文書全体から20kgの水分が空气中に排出され（つまり文書が乾燥する）、収納庫全体の空気中からの2 kgの水分とともに、冷房機から4 kg、収納庫と外部との隙間から18kgが収納庫外に排出される、ということを示している。同図右側の「冷房停止後の1時間」も同様で、この場合には文書は吸湿していることを示している。この図は大きな特徴が二つある。一つは、冷房開始にともなって本から空气中に水分が吐き出され、その停止にともなって同じ量の水が再び本に吸収されること。もう一つは、収納庫内外の空気の流通が意外に良いということである。後者については消火設備の点から気密性が良いと考えていたのだが、余り良くないということなのである。

5 まとめ

古文書の保存環境はこれがベストだ、とい

うような基準はまだ示されていない。重要なことではあっても、まったく地味な仕事だから、手をつけようとする人がいないのであろう。それでも何人かの専門家が提案している環境条件の共通的な範囲をとると、気温は18℃から23℃まで、湿度は55%から60%の間ということになる。図1や図2に示した池田家文庫の収納庫の実状のうち何%がその基準を満たしているか、心細い限りである。

さらに、上に述べた観測事実は複雑な問題を提供している。まずは、第3節の終わりで触れた温度なのか湿度なのかの問題、第2に、第4節の終わりに提起した、古文書自身が吸放湿を行っているという問題である。特に第2の問題については、今までの保存科学ではまったく触れられたことのない問題で、その現状が保存に適当なのかそうでないのか、この方面の専門家の研究の進展を期待したい。

周知のように現在この文庫のマイクロ化が進行中である。まことに喜ばしいことである。いままで池田家文庫は保存と利用の両面を考えながら管理せざるを得なかった。その完成後は保存だけを考えればよいのだ。そのときの池田家文庫の保存はどうあるべきか。今から英知を集めて、後世に悔いを残さないようにしなければならない。ここで述べた古文書の保存についての一連の研究や観測に際して、本学部美術教室の太田先生と附属図書館の参考調査担当の中野さんには大変お世話になった。記して謝意を表したい。

(さし・けん 教育学部教授)



池田家文庫に 医学史資料を求めて



中山 沃

私が鳥取大学医学部から岡山へ配置換えとなり、岡山大学医学部へ赴任してきたのは昭和32年1月である。その当時の『岡山大学医学部使覧』を読み、医学部の創立は、明治3年に創設された岡山藩医学館に始まり、外人教師にボードイン（のち私と石田純郎医博の研究で、誤りでありロイトルであることが判明）なる人物が来任したことを知った。

ボードインといえば、長崎養成所・大阪病院・大学東校で教鞭をとった人物を思い浮かべる。しかしボードインの経歴を調べても岡山へ来た形跡はない。岡山医大卒の森紀久雄（大藤真前学長と同級生、戦死）が岡山医学同窓会報に「ボードイン滞岡記」、「岡山藩医学館」の一文を載せており、やはりボードインとしている。この論文を足掛かりとして岡山藩医学館およびボードインの研究が始められた。備前藩の膨大な史料が、「池田家文庫」として本学中央図書館に納められていることを知り、池田家文庫の中の、弁達日記その他の日記、藩医達の奉公書など読むことになった。その当時は池田家文庫の目録はガリ版刷りの仮目録で、不完全なものであり、現在のような立派な目録ではなかったため、医学資料の探索も限られたものであった。

この時期に相前後して、昭和36年岡大医学部百周年記念会発起人総会で『岡山大学医学部百年史』の刊行が企画され、私もその編集委員の一人として指名され、昭和41年7月、第1回編集委員会（委員長西田勇）が開かれた。私は、岡山藩医学館設立前史と、医学館創設から甲種岡山県医学校までを担当することになった。この作業の途中で、あの全国紛争が本学にも波及し、西田委員長は、医学部

長に就任し多忙を極め、昭和44年9月授業再開となるが、翌45年4月、私が教授に就任すると共に、委員長に選ばれ、本格的な編集が再開された。責任上、生理学研究・教育と百年史編集の二足のわらじを履きながらの2年間であった。幸い津島土生の公務員住宅に入っていた関係上、池田家文庫に足を運ぶのは苦痛ではなく、未知な資料を求める好奇心で胸をふくらませていた。コピー機のない時代であったが、自由に書庫に入り、藩医の奉公書を持ち出してきて、筆写したのも遠い思い出である。次第に参考係員の皆様にも馴染みになり、親切にいただいたことを改めて感謝したい。

さて、この池田家文庫の明治3年の「弁達日記」4月16日の条に、「蘭医ロイドボードイン、御頼ミ学館へ御引請相成候」とあり、また岡山県総合文化センター所蔵の資料に、「ロイドルボードイン、年令当午二十七才」と記してある。これらの資料を根拠として『岡山市史』でも、森氏も、ボードインが岡山藩医学館で教鞭をとったことにしてしまった。ロイトル雇傭の直接交渉にあたった在大坂の藩医明石退蔵の「奉公書」は、ボードインとロイトルが別人であることをはっきり示している。過去の郷土史家らがもっと丹念に池田家文庫の資料に目を通していただければ、この誤りは起こらなかつたであろう。文庫目録が昭和45年に完成し、ロイトル雇傭の「條約書」の写しも陽の目を見て、Dr.J.de Ruijter という署名の写しも判明した。

しかし何とんでも決定的なのは石田純郎医博の調査結果である。学園紛争盛んな頃、まだ医進の学生であった石田君が、先祖の守

屋庸庵（緒方洪庵の門人）の調査のことで私の部屋を訪れたのが最初であった。それ以来現在まで、親交を重ねているのであるが、私の口からボードイン即ロイトル説への疑問が話された。彼は、大胆にもオランダ陸軍省にロイトルについての問い合わせの手紙を出し、その返信によりその出生地などが分かった。さらに、彼の母の出生地の役場やハーグの国立古文書保存館へ問い合わせの手紙を書き、ロイトルのフルネームは、Franciscus Johannes Antonius de Ruijter で、オランダのアルフェンで、1841年6月6日に生まれたことが判明した。石田君はその後、オランダで直接資料を蒐集し、ロイトルの母が養成所教師ボードインの姉であることをつきとめ、ボードイン即ロイトル説を完全に打ち砕いた。

私もかつて他人の発表結果を、原資料にあたらぬまま引用し、その誤りを指摘されたことがあり、それ以来、戒として常に原資料の探究に心掛けている。現在大友信一文学部教授を中心にして「吉備洋学資料研究会」と名づけて、定期的に研究発表会を開催したり、「洋学資料による日本文化史の研究」と題して次々論文を小冊子として刊行している。医学の分野だけでなく、国語学、ドイツ語、絵画、西洋史の諸先生方に接し、多角的な知識を学び得たのは、池田家文庫の取り持つ縁と深く感謝している次第である。

また備前藩主がどのような病気に罹り、どんな医者の治療を受けたかなども池田家文庫の諸資料で調査した。その結果、岡山で病気になった場合には藩医だけの治療にまかせるだけでなく、京都や大阪から当代の著名な名医をわざわざ招いて、治療を受けていたことが判った。これは大変な物入りであったようだ。この中でも第八代藩主慶政は手の痛みのため、大阪で開業し、傍ら蘭学塾を開いていた足守藩医緒方洪庵を招いて後楽園の部屋で診察を受けた。それは万延元年（1860）閏3

月のことで、洪庵は門弟2人以下11人を伴い岡山へやって来た。池田家文庫に、この招待の交渉や応接の内容を記した文書が2点あるが、以前は大分物入りであったので、今回はできるだけ簡素にしようと緒方一門と交渉する様子が分かりおもしろい。このような文書の存在が分かったのは、やはりこの文庫の目録が刊行されたからである。

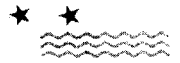
また特筆すべきことは、鹿田分館所蔵の古医書の目録が大原農書文庫の目録と合冊して『岡山大学所蔵大原農書文庫、古医書集成目録』として昭和62年3月刊行されたことである。この古医書は岡山藩医学館時代から今日まで幾多の変遷を経ながら継承されてきたものや、県内外の蘭方医の旧蔵のものが篤志家及びその子孫から寄贈されたものである。今日ではなかなか手に入らぬ貴重な刊本、写本で、筆者の医学史研究のため大いに活用させていただいた。理解ある図書館運営委員会や館員のご協力でのこの目録の出来上がったことは、この方面の研究者にとって非常に利用価値のあるものと嬉しく思っている。

医学史に関する筆者の活動が眼にとまり、前述のように、文学部大友教授を中心に本池教授、高橋助教授、前述石田医博などと吉備洋学資料研究会がつくられ、小さいながらも洋学研究の芽は育ちはじめた。定年退官後は止むを得ず西宮市の自坊に帰らなければならないが、この研究会にも引き続き参加し、医学史研究の活動だけは続けてゆきたいと思っている。

最近、池田家文庫の文書類のマイクロフィルム化の作業が始まり、多数の研究者に池田家文庫の情報が公開され、備前藩などの歴史が解き明かされることを期待しています。永年、医学史の研究にご協力いただいた本館及び鹿田分館の館員の方々に感謝しつつ岡山大学を去ります。

（なかやま・そそぐ 医学部教授・鹿田分館長）

≡
★
コンバージョンセンターから



岡本 昌也

1 はじめに

昨年の8月末の開始から早くも7カ月が経過いたしました。その間の大学側の関係者の皆様方のご協力に対し、改めて心より感謝申し上げます。

お陰様でプロジェクトも試行錯誤の連続の感、なきにしもあらずですが、無事進行していることをご報告いたします。決して、満点がとれる内容とはいえないまでも、合格点は充分取り得たレベルと判断しています。

3月22日の時点で撮影が完了したコマ数、ジャンル別リール数は、下記のとおりです。

総記 (A)	213リール
国事維新 (S)	90リール
行制 (E)	47リール
行政 (F)	27リール
領地 (B)	9リール
藩士 (D)	123リール
計	509リール (460,679コマ)

2 補修作業と目録照合作業がポイント

当初の計画との比較で、出来上がり進度は量的にもまた分野的にも若干の相違はありますが、ほぼ予定通り進行している状況です。特に、今までの作業進行の過程で痛感したことは、補修作業と目録照合作業にかかる工数が、思っていた以上という点です。

この2工程は、収録精度の向上また維持を達成するためには絶対条件ともいえる、大切なプロセスで、プロジェクトの評価に結びつく大事な事前準備工程です。今後とも特にこ

の工程に注視して、関係者間の合意を前提に知恵を出し合い、より有効な具体的な運営手法を模索、構築することにより、プロジェクトの質的向上を図ってゆきたいと思います。

補修作業は岡山市内の専門業者をお願いしています。虫食い等の経年変化によるさまざまな劣化史料に対して、家伝、秘伝の域ともいえる伝統的修復技術で、対処していただいています。

また、目録照合作業を中心とする解読業務の遂行のため、郷土史研究者をはじめとする専門的能力をもったメンバーの方々を中心に「池田家文庫藩政史料研究会」を組織いたしました。地元のこのような関係者による応援体制は、本当に心強いパートナーと認識しています。

3 外部機関・関係者の反響について

プロジェクトスタート以来、マスコミをはじめ全国の大学図書館、史料館、文書館等の関係者より注目されていることを実感せざるを得ません。東京で進行している国立国会図書館の明治期刊本マイクロ化プロジェクトの現場見学に来られた人達からも「池田家文庫の方も頑張ってください！」と激励を受けることもあります。刊本とは違う古文書・記録類のマイクロ化変換作業への関心の高さを改めて認識する次第です。そのような場面に、数多く遭遇することにより、「今、なぜ、歴史資料の保存また活用が注目されているのか……」「われわれメディアコンバージョンの専門家に求められている今日的な課題は…」と自問せざるを得ません。

そのためには、まずはわれわれが属してい



る業界の人間に対して、歴史資料についての「保存理念の普及促進」と「実務のレベルアップ」を図っていくことが、最初の課題とされています。そのためには、このプロジェクトで採用されたさまざまな考え方、新しいノウハウを整理、業界関係者にフィードバックすることが、テーマになるものと思います。

4 「史料管理学研修会」受講者を迎えて

昨年11月7日、国立史料館主催の平成2年度「史料管理学研修会」短期研修課程のカリキュラムの中に「岡山大学附属図書館における史料管理」が取り上げられ、同館でレクチャーとコンバージョンセンターの見学会が催されました。われわれコンバージョンセンターのメンバーにとっても、初めての本格的な見学会であり大いに期待した次第です。当日の見学会の場では参考になる意見交換をすることも多く大変有意義な機会でした。

その中で、まず第一に感じたことは、参加者の層が幅広い点です。図書館、史料館、文書館、公文書館、自治体史編纂室などの歴史資料の保存に関する機関に勤務している人達の施設の広がりです。しかし最近、企業の社会的責任のひとつとして企業活動の記録を系統的に収集、保存し後世に伝承することが叫ばれているにもかかわらず、企業の該当するようなセクションの人達が見受けられなかったのは、ムーブメントとしての歴史が浅くはじまったばかりであるからだと感じました。

二番目に見学者との会話内容より感じたことは、マイクロシステムに対する認識レベルです。約20年前のマイクロカメラ、フィルム、リーダープリンターの品質に対する知識がそのままといっても過言ではありません。このことは普及サイドであるわれわれの責任といえます。質問の都度、実作業を通して詳細説明をした結果、多くの参加者は、マイクロシステムに対する固定観念、先入観を捨て去っていただいたと思います。特に16mmフィルム

の解像力、マイコン制御の機材類、自動検索仕様、そしてレーザー方式によるコピーの品質には、高い評価をいただきました。このことは、史料の保存管理をする各施設にとって極めて有効な手段としての「マイクロシステム」を認識していただいたものと思います。保存と利用、組織的な管理からもマイクロプロジェクトが現実的な解決策として検討され始めることを願望する次第です。

その後、参加者からの問い合わせ内容等より、この見学会は、われわれにとっても本当に有効な機会であったと実感しています。その後も全国の大学関係者をはじめとする多くの人達が、私達のコンバージョンセンターを訪れています。

5 ケンブリッジ大学訪問記（'91.2.25～3.3）

ケンブリッジ大学は人間と自然が見事に調和したすばらしい環境にある、世界の知恵と学問の「宝庫」ともいべき大学です。

今回、訪れたのはその中にある東洋学部内の日本研究センターです。日本の中世史研究で世界的にも著名なコニッキー教授より、面談早々、「池田家文庫のマイクロ化は進んでいますか？」と流暢な京都訛の言葉で問いかけられました。変体仮名を難なく解読する同教授は、藩政史料をマイクロフォームで読める日を待ち望んでいます。今回の事業は海外からの期待と要請に応えるプロジェクトでもあることを強く思い知らされました。

6 結び

最後に、池田家文庫の藩政史料のマイクロ化プロジェクトは、先人の知恵を尋ねる時間旅行の「パノラマワールド」を実現すると同時に、膨大な貴重な歴史情報の「宝物殿」を構築する事業であることを改めて認識、コンバージョンセンターの従事者一同、完遂に向けて今後ともより一層頑張る覚悟です。

（おかもと・まさや プロジェクトリーダー）





マスカット



OPAC 公開

平成2年11月21日、岡大 OPAC が公開されました。これは、図書館および総合情報処理センターが提供する図書・雑誌情報データベースのオンライン検索サービスで、学内 LAN を通じて、全学の研究室から検索できるようにしたものです。

データベースは、MUSCAT (マスカット) と PEACH (ピーチ) の2つで構成されています。MUSCAT は、平成元年度以降に受入れた図書約40,000冊 (平成3年3月現在)、PEACH は雑誌約25,000種の書誌・所在情報です。

コンバージョンセンター通信の発行

池田家文庫藩政史料をマイクロフィルムに変換する事業は、図書館内に設営された「マイクロ化コンバージョンセンター」で実施されています。このマイクロ化事業についてはライブラリー・リフレッシュの号外として、「コンバージョンセンター通信」を発行し、その進行状況やトピックスを紹介しています。

池田家文庫マイクロ化記念絵葉書刊行

池田家文庫マイクロ化事業を記念して、同文庫の貴重な絵図が、お洒落な絵葉書(6枚一組)になりました。岡山大学と共同事業でマイクロ化を実施している丸善及び富士写真フィルム株式会社の企画によるもので、デザインは、本学清水國夫教授です。コンバージョンセンターの見学者にプレゼントされます。

図書館電算化システムを拡充

図書館電算化システムのハードウェア構成が次のように飛躍的に充実しました。

- ①CPU (中央処理装置) 記憶容量の増強 (8メガバイト⇒16メガバイト)
- ②磁気ディスク装置 (外部記憶装置) 容量の増強 (3ギガバイト⇒4ギガバイト)
- ③オフィスプロセッサ (端末のコントロール) の増設 (2台)
- ④端末の増設 (21台⇒41台: 中央館16台⇒32台、鹿田分館3台⇒6台、資生研分館1台⇒3台)
- ⑤プリンタの増設 (13台⇒23台: 中央館11台⇒20台、鹿田分館1台⇒2台)
- ⑥回線接続機構の新設 (公衆回線を通じてのオンライン検索) (4回線)

このように機器が大幅に充実したこととともない、図書館はシステムの全面展開を目指しますが、その主要なターゲットを次の点に置いています。

- a. 利用者オンライン検索端末の増設による情報提供機能の向上 (6台)
- b. 受入サブシステム (図書購入や予算管理等の事務処理) の稼働
- c. 遡及入力 (過去のデータに遡って入力) によるデータベース作成の推進

「岡山大学附属図書館資料受入業務電算化検討委員会」発足

このたび電算機ハードウェアの拡充を機会に、これまで運用を保留してきた図書受入サブシステムの稼働に向けて、標記の検討委員会を設置しました。今後、必要な諸要件につ

いて検討を加え、実運用に向けた活動を行います。

鹿田分館に CD-ROM Medline 設置

鹿田分館では、CD-ROM Medline (1966-) を備え付け、1月から開館時間中無料で学内利用者に開放しています。

Medline は、米国国立医学図書館 (National Library of Medicine : NLM) が作成する広範な生物医学関連分野の書誌データベースです。

データは毎月追加され、最新のデータまで検索できます。その内、1975年以降の文献の約60%に抄録が付いています。

操作法は非常に簡単で、検索結果のデータを画面で見たり、プリントしたり、ディスクケットにダウンロードすることもできます。また、チェンジャーには一度に6枚の CD-ROM が収納でき、効率よく検索できます。

検索語としては、自由な単語 (または複合語) を入れることができますが、フリータームのみですと、ノイズや洩れが生じます。Medline の作成機関 (NLM) では、収録論文の一つ一つに、その記述内容に対して最も確かな見出し語を、統制された用語集 (シソーラス) より選択して割り当てています。この用語集を MeSH (Medical Subject Headings) と呼びます。

Medline の特徴は、この MeSH を使った主題検索法にあります。CD-ROM Medline は、このシソーラス機能を柔軟にサポートしており、適合率の高い検索ができます。当館

では、利用者により効果的な検索をしていたために、実習を中心にしたセミナーを、曜日、時間帯を変えて行っています。

CD の利用及びセミナーについては、電話での予約も受け付けています。

詳しいことは、鹿田分館参考調査係 (内線 2735) まで、お問い合わせください。

Pfeffer 文庫の貴重書復刻される

資源生物科学研究所分館所蔵の、ドイツの植物学者、ヴィルヘルム・ペッファー (Wilhelm Pfeffer, 1845-1920) の『植物生理学』“Pflanzenphysiologie”の特製初版本が、このたび、同研究所で復刻されました。

『植物生理学』は、資源生物科学研究所の前身である大原奨農会農業研究所時代に、大原美術館の設立者でもある大原孫三郎が、その遺族から購入した (1921年) ペッファーの蔵書のなかに含まれていた貴重書で、植物生理学の教科書としては世界最初のものといわれます。

このたび復刻された『植物生理学』は、同著の改訂に備えて、特製初版本の余白にペッファー自身が、メモや実験結果を、鉛筆やペンでぎっしり書き込みをしたもので、植物生理学成立の過程などを明らかにするうえで、大変貴重な資料として評価されているものです。

その復刻版は、ペッファーゆかりのドイツの研究所や大学をはじめ、国内の大学研究機関などに寄贈されることになっています。

'91図書館オリエンテーションの案内

本学学生の皆さんに中央図書館を有効に利用していただくよう新年度早々オリエンテーションを計画しています。日程やメニューなどの詳細は、追って掲示やライブラリー・リフレッシュでお知らせいたします。



会議

◆ 学 外

- 10.24~10.26 国立大学図書館協議会中国四国地区協議会係長会（於島根大学）
- 10.31~11. 2 第31回中国四国地区大学図書館研究集会（於徳島大学）
- ・資料の構成と収集・管理について
 - ・図書館の機能変化（OA 機器化）と管理運用について
11. 1~11. 2 第4回国立大学図書館協議会シンポジウム（於京都大学）
- ・利用できる CD-ROM 資料について
 - ・各種 CD-ROM の利用方法
- 11.13 平成2年度学術情報センターシンポジウム
- ・NACSIS データベース事業の新展開について
- 1.29~1.31 平成2年度国立大学附属図書館事務部長会議（於松山大学）
- ・「図書館学」試験合格者の採用の改善について
 - ・大学図書館の施設、設備の今後における検討課題について
 - ・学内 LAN の構築に当たり図書館が果たす役割について

◆ 学 内

11. 1 第2回池田家文庫藩政史料マイクロ化実務打合わせ会
- ・補修取り扱い要領について、その他
- 11.29 第3回附属図書館資料選択委員会
- 12.14 第3回池田家文庫藩政史料マイクロ化実務打合わせ会
- ・目録照合整理作業要領について、その他
- 12.19 第3回附属図書館広報委員会
- ・館報「楷」No13の編集について、その他
- 1.18 第4回池田家文庫藩政史料マイクロ化実務打合わせ会
- ・目録照合整理作業について、その他
- 1.24 第3回池田家文庫等特殊文庫委員会
- ・資料の取り扱いについて
- 1.24 第3回附属図書館運営委員会
- ・全学共用図書館購入費等の配分について
- 1.31 第4回附属図書館資料選択委員会
- 3.22 第5回池田家文庫藩政史料マイクロ化実務打合わせ会
- ・目録照合整理作業について、その他
- 3.26 第5回附属図書館運営委員会
- ・平成4年度概算要求について、その他

研修

- ・史料管理学研修会（11.5~11.16）
参加者 小林雅代

- ・平成2年度国立学校幹部職員研修会
参加者 岩元忠幸（11.12~11.15）

編集委から

そよ吹く風を捉えんと、芽ぐむ小枝はその扇を開く（ワズワース）。春の到来です。

新生広報委員会も満1才を迎えました、われわれの広報活動の目的は、トリプル方式を主軸にした情報提供です。まず館報は、特集で図書館の改善につながる情報の提供を主眼にしてきました。ライブラ

リー・リフレッシュ（ニューズレター）は、身近な図書館サービスの情報を、そして概要は、整備・充実計画の指針となる情報を提供してきました。活動の成果は、手応えとして感じられています。楷の木のように、枝の広がりをめざして、一層のご支援をお願いいたします。

岡山大学附属図書館報「楷」 No.13 平成3年3月29日

発行人 岩元忠幸 広報委員会 委員長 田村 委員 岡、中野、三棹、川上、井ノ上、竹久、青井
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話0862-52-1111